

論文の内容の要旨

論文題目 中国の素質教育と教育機会の平等に関する事例研究
—都市と農村の小学校の事例を手がかりとして—

氏名 代玉

本研究の目的は、地域間格差が激しい中国の実情を踏まえ、素質教育の実践を「教育機会の平等」を切り口に、教育社会学的観点から検討することにあつた。序章においては、本論文で扱う基礎概念の定式化や研究意義の検討、先行研究のレビューなどを行なった。

続く第 1 章では、「素質」をはじめ、「素質教育」の概念、特徴、構造などと共に、素質教育が依拠する諸理論について検討した。そして、素質教育と応試教育、基礎教育と「全面的な発展」の理念との関係を考察した。その結果、「素質教育」概念は、「素質」概念の多義性を反映すると同時に、多義的であるとはいえ、「応試教育」概念と相対化されて理解されていることが多いこともまた示した。いずれにせよ、本章では、素質教育を構成する諸要素を検討し、その最も核心的な要素として、学習者を教育の中心に置くべき（学習主体）だとする理念を分析し、「素質教育」の概念と日本の新しい学力観との類似性にも言及した。

また、「素質教育」概念を分析するにあたって、「教育の質」と「教育の平等」の両方を基盤に置く必要があると考え、素質教育を教育社会学的観点から検討することの意義を考察した。

第 2 章では、第 1 章を受けて、素質教育の先行研究を踏まえた上で、教育政策との関係における「素質教育」、具体的には、素質教育政策形成の歴史的経緯、素質教育を実施するための主な政策、および、素質教育政策の策定原理を検討した。本章で得られた知見としては次の 2 点があげられる。第 1 に、素質教育政策における「素質教育」

の理解は中国における関連学界での議論とおおよそ一致し、特に「応試教育」と対置され、それを克服するものとして定義されることが多い。また、教育政策における「素質教育」の概念は、実際は時代によって変化している。第2に、素質教育の施策内容や策定原理は理論的には明快であるかもしれないが、教育実践を見た場合には、現行の中国の社会・文化的文脈の中で、理念とは逆行する「意図せざる結果」が生じかねないことを示唆した。

第3章では、素質教育政策の実施状況を検証するために、上海市における素質教育の先進的な小学校（S校）の事例を取り上げ検討した。S校における「算数科目」と「本校課程」の教科をそれぞれ考察し、以下の3つの知見が得られた。第1に、先進的な地域における素質教育の実践事例の特徴を指摘した。つまり、S校の教育目標において素質教育的要素と応試教育的要素の両者が混在し、また、教科ごとに両者の力点が違うことが確認された。つまり、従来の応試教育に基づいた知識だけではなく、素質教育的な資質の習得も同時に対象となる状態を描写・分析した。なお、こうした「素質教育」の実践を通じて、従来の「応試教育の重視」という単一的な社会的要請から、素質教育が求める「学習者を授業の主体にする」などの目標が同時に掲げられ、二層化した社会的要請への対応を学校現場が求められるようになる状況を問題提起した。第2に、第1で分析した素質教育実践のサポート条件を、学校内・外の状況分析を通じて明らかにした。つまり、学校内のサポート条件としては、「教師間の協働性」と「校長・教師の協働性」、学校外のサポート条件に関しては「保護者」、「社会機関」、「研究機関」、「コミュニティ」関連のサポート条件を分析した。第3に、第2のサポート条件を、社会構造と社会文化の2側面から分析した。本章で扱ったS校は上海市の学校であり、社会・経済的に恵まれているが、こうした社会的文脈、階層の影響を、今日中国で問題とされている「関係資本」などの社会的弊害との関連、学校内・外のサポートとの関連で考察した。第4に、経済資本、文化資本、社会資本に恵まれた事例としてのS校の分析を通じて、素質教育と応試教育の両方を確保する教育実践と「教育の総合資本」との関係を考察した。そして、「教育の総合資本」に恵まれない学校では、素質教育と応試教育を同時に実現させる上で困難に直面することを指摘した。

第4章は第3章との相対化を意図した章である。そのため、第4章では非先進的な地域の都市のG校の事例を取り上げた。そこで得られた主な知見は以下の4つである。第1に、非先進的都市地域の素質教育の実践事例の特徴は、応試教育に偏って対応している点にあることが示唆された。そこでは、素質教育と結びつきやすい教科にせよ、算数にせよ、形式的には素質教育のノウハウを取り入れているように見えるが、授業のプロセスを見ると、応試教育として機能していることが確認された。つまり、G校における素質教育の実践は、表面的には素質教育の方向性に沿ったカリキュラムの構成・伝達に変容が見られたが、実質的には、応試教育に基づいた知識の習得、あるいは、能力の育成として作用していた。第2に、G校においての学校のサポート条件を検討すると、上海市のような学校内・外のサポート条件を有していないことが指摘され、その影響を分析した。第3に、G校が学校のサポート条件が得られない原因を、上海市との比較をしながら、社会的、経済的、文化的格差に注目した。第4に、応試教育の圧力にさらされるG校は、S校のように経済資本、文化資本、社会資本という

「教育の総合資本」においては恵まれていないため、応試教育しか保障できていないことを問題提起した。つまり、第3章の知見を踏まえると、教育機会の平等の観点からS校とG校との間には素質教育に基づいた知識や能力の習得機会などに格差がある。

第5章では、非先進的な地域の素質教育先進校である農村小学校H校の事例を扱った。その結果、以下のことがわかった。第1に、素質教育の実践における非先進的農村地域の事例では、算数授業を観察した場合においても、素質教育を反映した本校課程の観察場面においても、素質教育と応試教育のどちらをも推進するのが難しいという、前述の都市型素質教育の実践とは異なる文脈が見られた。つまり、社会・経済的条件の厳しさによって応試教育的意味での成果（進学実績）を出すことが難しく、素質教育も実現する条件がない中で、応試教育と自ら距離を置き、その代替策として、児童の生まれつきの「素質」を強調し、結果的に一種のエリート教育に移行している様子が見られた。第2に、学校のサポート条件に関しては、学校内サポートの有無にかかわらず、地域間格差の中で学校外のサポート条件が希薄であることが素質教育の実践に影響する様子が分析された。第3に、農村小学校としてのH校がかかえる総体的に貧弱な社会・経済的サポート条件、「関係資本」の影響が、都市部におけるより顕著に見られ、受験文化と「関係資本」とが連動していることが推測された。

第6章は、第3章、第4章、および第5章の事例についての比較を行ない、以下の3点を指摘した。第1に、素質教育実践の展開プロセスにおいては、カリキュラムの伝達・構成を通じて教育機会の不平等のメカニズムが作用することを、3つの小学校の比較分析を通じて示した。第2に、3つの小学校における素質教育の実践において見られたカリキュラムの伝達・構成のプロセスにおける差異、サポート条件の相違は素質教育の展開に影響し、都市部と農村部の社会的文脈の違いが意味することが指摘された。本論文で比較した事例に関して、都市部のS校とG校との比較においては、対比できるものが多かったが、農村部のH校の素質教育の実践には独自性が見られた。第3に、3つの小学校における素質教育の実践の比較分析を通して、中国の素質教育の実施、展開プロセスを、「不平等」の観点から考察する意義を指摘した。たとえば、「素質教育」理念の実現が、社会・経済的条件に恵まれたS校が階層上位校であるために確保できる条件、例えば、「関係資本」の弊害抑制、学校内・外の有利なサポート条件の形成などを前提としていると思われることを批判的に検討した。こうした素質教育の実践に必要な学校内・外のサポート条件の確保などは、社会資本、経済資本、文化資本の豊かさと不可分につながっている。このように、「素質教育」の理念に基づく実践には、従来の教育よりも更に多くの外部的、内部的な資源が求められていると思われ、地域格差が激しい中国にとって、それは学校間の格差拡大の課題と密接な関係にあると考えられる。

終章では、得られた知見のまとめ、そこから導きうるインプリケーションを示した。主に、素質教育研究、教育政策研究、中国における社会学、日本の学力研究の4分野に対する研究意義を提示した。最後に、「素質教育」に関する体系的な理論研究を構築するために今後の課題を提示した。